



【口絵5】春日鹿曼荼羅（北京終町春日講所蔵）



【口絵4】春日鹿曼荼羅（大阪市立美術館所蔵）

馬具の形式からみる大阪市立美術館「春日鹿曼荼羅」について

田 渕 花 歩

はじめに

大阪市立美術館所蔵の「春日鹿曼荼羅」(以下、大阪市美本と称する)【口絵4】とは、春日信仰によって生まれた春日曼荼羅の一種であり、神の使いとされる神鹿に乗り御蓋山みかさやまに降り立つ武甕槌命たけみかづののみことを表現したものである。「春日鹿曼荼羅」については『大阪市立美術館紀要』第八号(昭和六三年(一九八八)当館発行)において、石川知彦氏が大阪市美本1を含む、当館に所蔵・寄託されている春日鹿曼荼羅について資料紹介を行っているが、大阪市美本のみ焦点を当てた研究は筆者が調べた限りでは知らない。本稿では、春日鹿曼荼羅全体の制作背景と大阪市美本の神鹿が身に着けている装飾について考察を行うこととしたい。

一、伝説上の鹿

まず、春日鹿曼荼羅2に神鹿3が描かれた経緯を述べる必要があるだろう。

春日社の社伝である『古社記』によると神護景雲二年(七六八)

に常陸国(現在の茨城県)の鹿島神宮の祭神である武甕槌神は神鹿に乗り御蓋山に影向した。武甕槌命が神鹿に乗って春日の地に來臨したことが神鹿の由緒である。では、なぜ武甕槌命は鹿に乗るとされたのだろうか。武甕槌命と鹿との関連についても考える必要があるだろう。『古事記』には、春日社の由緒に繋がる伝説が残される。国譲りの説話によれば、天照大神は、これまで葦原中国を平定していた大国主命に代わり天之尾羽張神と武甕槌命の親子を任命したが、天安河が道を塞いでいたため他の神が通ることができず、そのため山肌や川などの難所を渡ることができると天迦久神4が迎えに上がった。天之尾羽張神は息子である武甕槌命を推挙し葦原中国に降臨することとなったが、この天迦久神は一説に、鹿の神とも称されている。鹿島神宮の祭神である武甕槌命が葦原中国に降臨する様子こそ、武甕槌命が御蓋山に影向した際に鹿に乗り春日の地に降り立ったという伝説の源があると考えられるだろう。

春日大社は藤原氏の氏神として信仰されたが、藤原氏の氏寺であった興福寺5は春日大社よりも古い歴史を有している。天智八年(六六九)、藤原鎌足の夫人である鏡女王が、興福寺の前身である山

階寺を現在の京都府に、鎌足の念持仏である釈迦丈六像を安置するため造営したことに始まる。その後、藤原京に移され厩坂寺と称した。平城京遷都とともに平城京左京三条七坊に移され鎌足の息子である藤原不比等により和銅三年（七一〇）「興福寺」と号された。春日大社と興福寺は藤原氏の氏神、氏寺として緊密な関係を有するが、なかでも、藤原冬嗣により弘仁四年（八一三）に父・藤原内麻呂の追善のため建立された興福寺の南円堂は平安時代になると本尊である不空絹索観音を武甕槌命と同体とする信仰が生まれた。不空絹索観音は鹿の皮を身に纏っていることから鹿皮観音も呼ばれており、このことが不空絹索観音と武甕槌命を結びつけたと考えることができよう。⁶⁾

二、装飾される奈良の鹿

春日鹿曼荼羅は、御蓋山の地に春日社第一殿の祭神である武甕槌命が降り立つ様子を描いたものである。春日鹿曼荼羅は現在三十幅ほどが確認されている。そのうち最古級とされるものが、陽明文庫所蔵の「春日鹿曼荼羅」（以下、陽明文庫本とする⁷⁾）と奈良国立博物館所蔵の「春日鹿曼荼羅」【図1】（以下、奈良国立博物館本とする⁸⁾）である。（いずれも鎌倉時代）そして大阪市美本には銘文が記されており、三社託宣のうち春日明神の託宣文と同文のものと「春日社大宮方住京神人之本尊」「応永十三年霜月日 願主 性元」という内容が記されていることから、陽明文庫本などの鎌倉時代から時代は下り、室町時代（十五世紀）の作と考えられる。この銘文により大阪市美本の発願者が現在の京都府に在住していた春日社神人（神社に奉仕する人）の性元という人物であることがわかる。⁹⁾

大阪市美本の特徴は、室町時代には一般的でなかった非常に古式な馬具、すなわち輪形の鐙（輪鐙）が描かれている点である。大阪市美本の神鹿は唐鞍を装着する。唐鞍とは、舶来の唐様の伝来を継承して金銅金具で飾り立てるものを常とする¹⁰⁾。祭礼や儀礼の際に使用する神馬に着けられる馬具である。「輪鐙」は最古級の春日鹿曼荼羅である陽明文庫本にも描かれている。先述のように輪鐙は古式な鐙であるが、それについて馬具の伝来を概観しながら考えることにしよう。

古墳時代の遺跡から馬の骨や、渡来人に関連する実用的な道具や馬具が生活の間から発見されるのに対し、古墳から武具とともに、発掘される馬具は、辻金具や杏葉などで煌びやかに装飾された「装飾馬」として葬られた人の威厳を示すために用いられたと考えられる。古墳時代（五世紀前半）に朝鮮半島から日本にもたらされた最初の鐙が「輪鐙」である。奈良県田原本町の笹鉾山二号墳からは六世紀前半の人物埴輪や馬形埴輪【図2】、木製品などが多数出土している。馬形埴輪は三体のうち二体が全容のわかる状況で出土しており、当時の装飾された馬の姿を確認することができる¹¹⁾。そして、馬形埴輪には輪鐙を伴った鞍を身に着けるのが一般的である。古墳時代の遺跡からは、実際に用いられた木製や鉄製の輪鐙が出土している。やがて五世紀末になると先端部が袋状となり足の爪先を乗せる「壺鐙」が用いられるようになり、輪鐙と壺鐙は日本国内で平行して使用されるようになる¹²⁾。

山田良三氏によると日本に渡来をした輪鐙は、騎乗が得意な渡来人が用いたものであった。日本に伝来して間もなく騎乗に不得手な日本人のため杓に滑り止めが付くようになり、輪部の杓受の部分は

幅が広いものが現れた。これは、乗馬が得意な渡来人と異なり、日本人は乗馬中に体を安定させるため踏ん張る必要があったからだと推測される。輪鐙は足を前に滑らせると、落馬の危険があることから、騎乗が下手な農耕民でも馬を乗りこなせるよう、足が前に出ない壺鐙の形状に変化していったと推測している。壺鐙が半舌鐙や舌長鐙など、より踏ん張りが効く騎乗に適した鐙に姿形を変えたのはこのためであろう。輪鐙は五世紀末から六世紀後半頃まで、その姿を表す。その後は壺鐙が主流となり輪鐙は姿を消す。輪鐙が実用面で姿を再度表すのは明治期以降である。

話題を大阪市美本に戻そう。では、なぜこのような古いスタイルの馬具が描かれるのであろうか。ここで注目されるのが神事との関連である。大阪市美本が描かれた室町時代において、この輪鐙は神事に使用されることがあった。

神事に使われている鞍は大きく分けて二種類がある。「御鞍（大和鞍）」と「唐鞍」である。

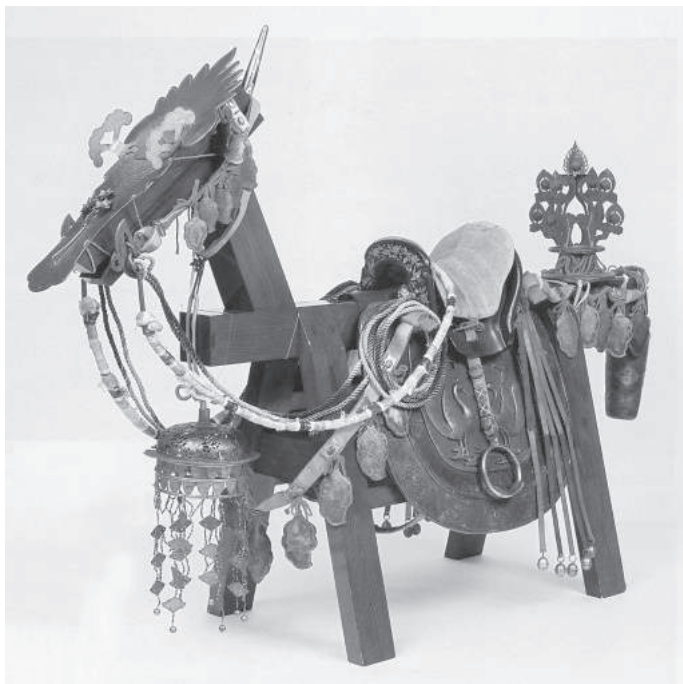
「御鞍（大和鞍）」は、主に騎乗用であり、公家が儀礼に用いた。鐙は壺鐙を用いた和様の馬具。寺社に伝世するものとしては伊勢神宮の御鞍があり、ここでは壺鐙を用いている。また、正倉院宝物の馬鞍第六号（中倉十二）も壺鐙を持つ。伊勢神宮の御鞍と正倉院宝物の馬鞍も騎乗を想定した宝物と考えられている。また春日大社が所有する神鹿鞍と呼ばれる鞍も壺鐙を用いる¹⁴。

一方、「唐鞍」はもともと、唐など外国の賓客の乗用に充てられていたが、のちに大嘗会の御禊行幸に供奉する公卿や加茂祭飾り馬などに用いられた。平安時代後期に最も盛んに用いられたが、さらに神社の祭礼を飾る威儀物としても使用された。舶来の唐様の伝統

を継承して金銅金具で華麗に飾り立てることを常とする¹⁵。今日私たちは神宝として伝わっている品で唐鞍を見ることができ、その代表的な例が、鎌倉時代の作とされる手向山八幡宮の「唐鞍」【図3】である。手向山八幡宮の唐鞍は三具が伝わっているが、一具が当時の形を比較的良く留めており、国宝に指定されている。この国宝のセットの唐鞍に輪鐙が用いられている。また、伊勢神宮の神宝は二十一年一度の式年遷宮の際に新しく調製され、用途や名称、形状などが古代の姿で継承され今日に至っている。康永二年（一三四三）の式年遷宮の際に作成された絵図を応永十七年（一四一〇）に写したと考えられる重要文化財「神宮神宝図巻」【図4】（前田育徳会所蔵）には唐鞍が記録されている。この絵図は伊勢神宮の式年遷宮に伴い神宝調進の際に撤下された神宝を神職立ち合いのもと拝見し、詳細に手控えしたと考えられる¹⁶。この手控えは式年遷宮の際に必ず行われている。これを行うことにより過去に制作されたものと同じ神宝を調進することが可能になる。絵図に見える神馬は、輪鐙のある唐鞍を身に着けている。

春日大社所蔵の絵馬にも同様の唐鞍が描かれている。絵馬は春日大社本殿御間塀（絵馬）の御造替の際に撤下され、新たに同様の構図の絵柄が描かれてきた。「唐鞍絵馬下絵」【図5】（京都府（京都文化博物館管理）所蔵）の裏には墨書【図6】で歴代の絵師が相伝、転写を行っていることが伝わる¹⁷。天文二十一年（一五五二）に芝喜多坊琳賢勝重が描いた室町時代末から、下絵の描かれた幕末まで代々受け継がれたものである。ここに描かれている神馬も輪鐙をつけている。

伊勢神宮の神宝は、造替によって代々継承されることで古い形式



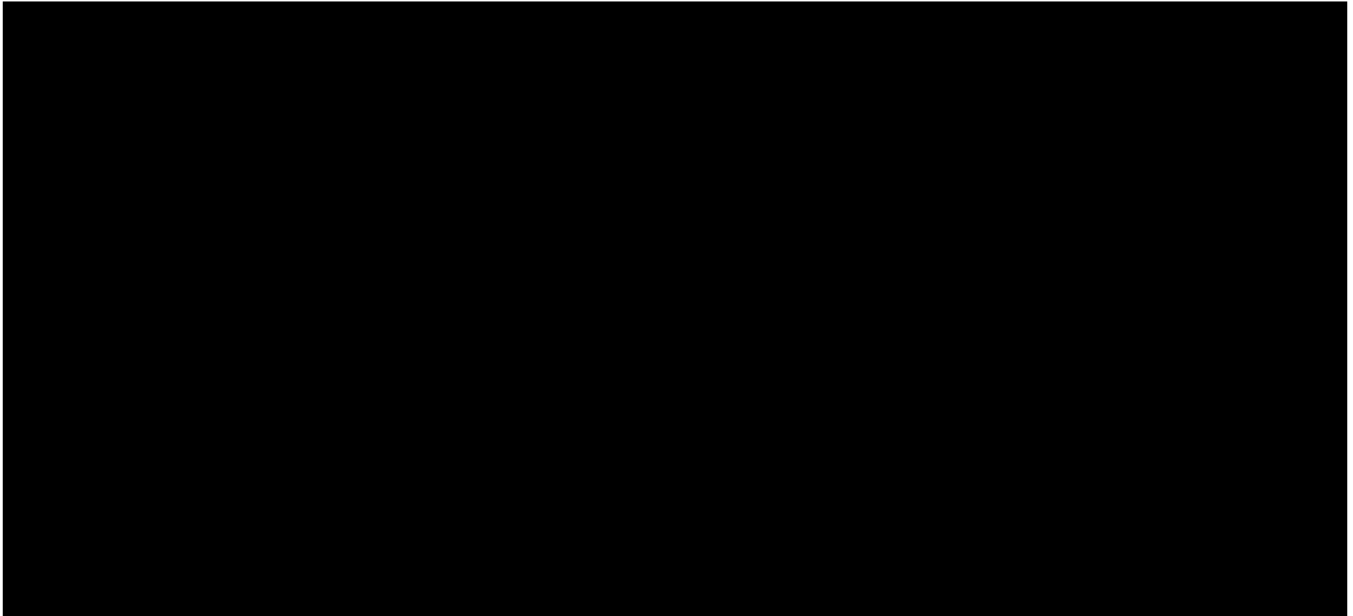
【図3】国宝 唐鞍（手向山八幡宮所蔵）



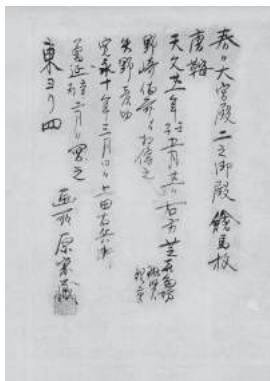
【図1】重要文化財 春日鹿曼荼羅（奈良国立博物館所蔵）



【図2】笹銚山2号墳出土一括品のうち1号人物埴輪・1号馬形埴輪、2号人物埴輪・2号馬形埴輪（田原本町教育委員会所蔵）



【図4】重要文化財 神宮神宝図巻 上巻 (前田育徳会所蔵)



【図6】唐鞍繪馬下繪 裏書墨書 (京都府 (京都文化博物館管理) 所蔵)



【図5】唐鞍繪馬下繪 (京都府 (京都文化博物館管理) 所蔵)



【图7】鹤斑毛御影馬（神宮司庁所蔵）



【图8】重要文化財 春日龍珠箱（外箱）（奈良国立博物館所蔵）

が受け継がれている。神宝に古墳時代に用いられた輪鐙が用いられているのもそのような理由からではないだろうか。『統日本紀』において、大宝二年（七〇二）に、飛驒国（現在の岐阜県）が神馬を献上したことが描かれている。生馬だけではなく「鶴斑毛御彫馬」

【図7】¹⁸（神宮司庁所蔵）のような馬形や土馬を神に奉げるのは古代日本の信仰において慣例であり、馬形埴輪から続く歴史的な背景が読み取れる。本稿では踏み込めなかったが、伊勢神宮の神宝に、大刀と見まがう「玉纏御太刀」が作り続けられているのも、伊勢神宮の神宝の起源が古墳時代まで遡ることを暗示している。

今日見る春日鹿曼茶羅には複数の図像が存在することからもわかるように、おそらく粉本となる春日鹿曼茶羅が複数存在し、そこから多くの写本が描かれたと考えられる。そのためか、春日鹿曼茶羅に描かれる神鹿を装飾する鞍には、「御鞍」と「唐鞍」の二種があるが、この二種の鞍は何らかの基準を以て描き分けられている可能性がある。注目されるのは、唐鞍が描かれているものには、筆者が調べた限り、人の姿で表現された神が描かれた例がないことである。一方、人の姿として描かれた神が神鹿に騎乗している姿を表現する「鹿島立神影図」や奈良国立博物館所蔵の重要文化財「春日龍珠箱」【図8】では、春日明神は御鞍（大和鞍）に坐し、鐙は舌長鐙と見られる。では、なぜ神が騎乗をする場合、壺鐙が採用され、輪鐙は表現されないのだろうか。鐙が我が国に渡来してきたのは古墳時代である。そこから、春日鹿曼茶羅が描かれる鎌倉時代までは七〇〇年ほど時代が隔たっている。その間に騎乗に向いているとされた壺鐙が普及し、踏ん張るための舌が伸び、半舌鐙、舌長鐙へと姿を変えた。一方、輪鐙は、祭祀に使用される神宝として奉納されたこ

とはあっても実際の騎乗には用いられなくなったのであろう。つまり、人の姿をした神が乗る馬には、騎乗にふさわしい馬具を用いたため、輪鐙が描かれることはなかったと考えることができる。

三、今後の課題

以上より、大阪市美本に描かれた輪鐙は、神宝を題材にしていると推測できる。人の姿をした神が描かれなかったため、人が乗る御鞍ではなく、神宝において用いられていた唐鞍を採用したのであろう。

ところで、大阪市美本には仏教的な要素も確認でき、それを楸に見ることがができる。石川知彦氏が指摘している通り¹⁹、鞍橋の上に金泥塗の反花、敷茄子、緑青を賦彩した蓮弁、蓮肉といった台座を表現し、楸を立てて紙垂が懸けられている。これに類似する作品としては北京終町春日講が所有する「春日鹿曼茶羅」（室町く安土桃山時代）【口絵5】がある。（以下、北京終町春日講本とする）この北京終町春日講本は、大阪市美本とは異なり、神鹿は白鹿ではない。しかし、装飾などは大阪市美本と類似しており、唐鞍に輪鐙が付属し、楸の根本には蓮華座が表現されている。なぜ神の木である楸が蓮華座の上に立っているのだろうか。これは神仏習合に基づくと考えるのが最も素直な解釈であろう。神は楸を立てることで表現し、その神の座として仏の座である蓮華座を配したと考えることができるだろう。

大阪市美本は、画面構成にも特徴がある。春日鹿曼茶羅は奈良国立博物館本のように、神鹿が雲に乗り、御蓋山に飛来する様子を描いたものがほとんどである。しかし、大阪市美本は神鹿こそ伝統的な唐鞍を身に着けているが、図中には御蓋山は描かれておらず、神

鹿は雲に乗っていない。唐鞍の背に立つ櫛や日輪、鳥居は描かれているが、春日大社を表す御蓋山や五仏、梵字などは表現されていない。大阪市美本は神鹿に焦点を当て、そのほかの表現は簡略化されるといふ独自の視点で描かれたものなのか、時代の変化とともに武甕槌命が春日社に來迎する姿を描くことよりも、『唐鞍で裝飾された神鹿とその背に立つ櫛』が礼拝されるようになった信仰形態を反映しているのだろうか。鎌倉時代から大阪市美本が描かれたとされる室町時代における春日信仰の諸相をさらに考察する必要がある。

おわりに

今回は、当館の所蔵する「春日鹿曼荼羅」について神鹿の身に付けている裝飾を中心に考察を行った。限られた所見ではあるが、神鹿の身に付ける裝飾や曼荼羅としての表現について、私見を述べることができた。神鹿の描かれ方や表現方法など大阪市美本は極めて特異な描き方であることが改めて判明した。今後さらに春日鹿曼荼羅の表現方法や解釈について深め春日鹿曼荼羅に対する信仰について解釈を進めることを課題としたい。

さいごに、垂迹思想や春日信仰に対する先行研究の浅学や考えの相違についてお断りするとともに大方の叱責を何卒頂戴したく存じる。

註

- 1 石川知彦「春日鹿曼荼羅の二、三の作例と春日本地仏」(『大阪市立美術館紀要』第八号 一九八八年)
- 2 「春日鹿曼荼羅」に関する情報は以下を主参考とした。重富滋子「春日信仰における神鹿とその造形」(『跡見学園女子大学美学・美術史学科報』十六 一九八八年)、松村政雄「春日鹿曼荼羅」(『國華』第八七一号 一九六四年)、景山春樹「春日の鹿曼荼羅—古代信仰の標型として—」(『國華』第九八一号 一九七五年)、行徳真一郎「影向と自然と—陽明文庫蔵 春日鹿曼荼羅—」(『國華』第一一七三号 一九九三年)、伊藤久美「春日鹿曼荼羅図」(『國華』第一一五三七号 二〇二三年)、藪田嘉一郎「春日鹿曼荼羅」(『日本古代文化と宗教』平凡社 一九七六年)
- 3 「神鹿」に関する情報は以下を参考にした。小島瓊禮「一 神となった動物」(中村生雄、三浦佑之編『人と動物の日本史4 信仰の中の動物たち』吉川弘文館 二〇〇九年)、田中久夫「藤原氏の鹿と神」(『御影史学論集』第三二号(横田健一先生卒寿記念号) 御影史学研究会 二〇〇七年)、『国宝 創建一二五〇年記念特別展 春日大社のすべて』(奈良国立博物館 二〇一八年)、『おん祭りと春日信仰の美術』(奈良国立博物館 二〇一八年、二〇一九年 二〇二〇年)
- 4 「日本書紀」では天迦久神は登場しておらず、武甕槌神が自ら葦原中国に降り立っている。
- 5 「興福寺」に関する情報は以下を主参考とした。吉川弘文館編集部「興福寺」(『奈良古社寺辞典』吉川弘文館 二〇〇九年)、『興福寺国宝展 鎌倉復興期のみほとけ』朝日新聞社 二〇〇四年)
- 6 春日大社とのつながりが強い興福寺も神仏習合の考えのなかで春日大社第一殿の武甕槌命と興福寺南円堂の不空罽索観音像は同体であるという理由から藤原氏の篤い信仰を集めていた。『特別展 西国三十三所—観音霊場の祈りと美—』(奈良国立博物館 二〇〇八年、二七二頁、二七三頁)
- 7 行徳真一郎「影向と自然と—陽明文庫蔵 春日鹿曼荼羅—」(『國華』(第一一七三号 一九九三年)
- 8 伊藤久美「春日鹿曼荼羅図」(『國華』(第一一五三七号 二〇二三年)
- 9 大阪市美本の銘文には、三社託宣から春日明神の託宣文「雖曳千日注連不至邪見之家／雖為重服深厚必到慈悲之室」が墨書されているほか墨書から

- 応永十三年（一四〇六）の発願と考えられる『美をつくし』大阪市立美術館コレクション』（大阪市立美術館 二〇二二年 一二七頁）
- 10 『大和の神々と美術 手向山八幡宮と手搔会』（奈良国立博物館 二〇〇二年 二十頁）
- 11 『笹鉾山古墳群―第一―第五次発掘調査概報―』（田原本町教育委員会 二〇〇五年 六―十一頁）
- 12 馬と馬具の伝来に関する情報は以下を参考にした。『令和五年度秋季特別展 馬でひも解く近江の歴史』（滋賀県立安土城考古博物館 二〇二三年）、千賀久「日本に伝えられた馬文化」（右島和夫編『馬の考古学』雄山閣 二〇一九年）、『鐙―その歴史と美―』（野馬追の里原町市立博物館（現南相馬市立博物館） 二〇〇〇年）、『馬―鐙・鞍から描かれた姿まで―』（彦根城博物館 一九九七年）、山田良三「社寺伝世馬具の壺鐙について」（『檀原考古学研究所論集 第七』吉川弘文館 一九八四年）、河蟠実英編『馬具編』（『有職故実図鑑』東京堂出版 一九八七年）、張允禎「日本列島の鐙にみる地域関係」（『考古学研究』第五一卷第三号（通巻二〇三号）二〇〇四年）
- 13 山田良三「二 古墳出土の鐙の形態的変遷」（齊藤忠編『日本考古学論集 八 武器・馬具と城柵』吉川弘文館 一九八七年）
- 14 春日大社所有の神鹿鞍一具に使用されている鐙は正倉院に所収されているものと比較すると同一年代とは速断しがたく、後世の複製品である可能性も考えられる。山田良三「社寺伝世馬具の壺鐙について」（『檀原考古学研究所論集 第七』吉川弘文館 一九八四年 九四、九五頁）
- 15 前掲註10奈良国立博物館二〇〇二年参照
- 16 『古神宝』（奈良国立博物館 一九八九年）三三、三三頁
- 17 裏面墨書「春日大宮殿二之御殿絵馬板／唐鞍／天文廿一年壬子五月廿一日右方芝喜多坊／琳賢／観重／野崎備前命分相傳之／寛永十年三月四日上田右兵衛／萬延辛酉二月日写之／画所原家藏「原」（朱文角印）「東ヨリ四」『式年造替記念特別展 春日大社 若宮国宝展―祈りの王朝文化―』（奈良国立博物館 二〇二二年）
- 18 『第六十一回神宮式年遷宮記念 伊勢神宮御神宝展 図録』（サンケイ新聞大阪本社 一九八六年、一一〇頁、一一一頁）
- 19 前掲註1大阪市立美術館一九八八年、二十四頁

【図版出典】

末筆ながら、本稿の執筆にあたり、図版提供ならびに転載の許可を下さりましたご所蔵関係各位に心より感謝の意を表します。

- 口絵5 春日鹿曼茶羅（北京終町春日講藏）『特別陳列 おん祭りと春日信仰の美術―特集 神鹿の造形―』奈良国立博物館、二〇二〇年
- 図1 重要文化財 春日鹿曼茶羅（奈良国立博物館所蔵）奈良国立博物館提供
- 図2 笹鉾山2号墳出土一括品のうち1号人物埴輪・1号馬形埴輪、2号人物埴輪・2号馬形埴輪（田原本町教育委員会所蔵）田原本町教育委員会提供
- 図3 国宝 唐鞍（手向山八幡宮藏）『大和の神々と美術 手向山八幡宮と手搔会』奈良国立博物館、二〇〇二年
- 図4 重要文化財 神宮神宝図巻 上巻（前田育徳会藏）『特別展 古神宝 神にささげた工芸の美』奈良国立博物館、一九八九年
- 図5 唐鞍絵馬下絵（京都府（京都文化博物館管理）所蔵）京都府（京都文化博物館管理）提供
- 図6 唐鞍絵馬下絵 裏書墨書（京都府（京都文化博物館管理）所蔵）京都府（京都文化博物館管理）提供
- 図7 鶴斑毛御彫馬（神宮司庁所蔵）神宮司庁提供
- 図8 重要文化財 春日龍珠箱（外箱）（奈良国立博物館所蔵）奈良国立博物館提供

謝辞

本稿の執筆に際し、左記の方にご指導を賜りました。心より御礼を申し上げます。

奈良大学文学部文化財学科豊島直博教授、奈良国立博物館岩井共二美術室長・中川あや教育室長、大阪市立美術館内藤栄館長